

# オオイヌノフグリ



(撮影：桐原佳介)

入蔵にて

早春、水色のカーペットを敷いたかのように畦や休耕田を彩る小さな花、それがオオイヌノフグリです。小学校6年間を佐賀市で過ごした私は、子ども時代の思い出として、広々とした田んぼのあちこちで、愛らしく咲き乱れるコバルトブルーの花々を、とても楽しみにしていました。後に、千葉の高校で生物の先生から、オオイヌノフグリはもともとヨーロッパの花であることを教えてもらいました。お気に入りの野の花が、明治時代に日本に入ってきたと考えられている帰化植物だったことに、私は何とも言えぬショックを受けました。

さらに大学生の頃、身近な草花の名の由来を調べていたら、オオイヌノフグリの「フグリ」は、昔の言葉で陰囊の意味だと知り、またまたショックを受けました。ある時、その種を見てやや納得しましたが、可愛い小さなハート型の入れ物にも見えます。日本在来のイヌノフグリという花があり、それよりも植物全体が大きいので、オオイヌノフグリと名付けられたそうです。このオオイヌノフグリには「変り種」がいくつか報告されています。普通オオイヌノフグリの花びらは4枚に見えますが、まれに5枚、6枚のものがあるそうです。また花の色も突然変異のためか、青いオオイヌノフグリが咲き乱れている中に、白い花が咲くこともあるそうです。私は、自宅のそばで、少し毛色の違う桃色がかった薄い紫色のオオイヌノフグリを見つけたことがあります。いまや、日本のいたるところで見られるオオイヌノフグリ、ちょっと気をつけて眺めてみると、どこかで変り種に出会えるかもしれませんね。



少し色の違うオオイヌノフグリ (右側)

自然観察指導員 桐原真希